

戸塚駅西口から約7分のところにあるNPO法人こまちぶらすが運営しているCafe&雑貨「こまちカフェ」。10:00～17:00オープン、ランチは11:00～12:30、12:30～14:00の2回（予約等は、ホームページで確認してください）



(上)「こまちぶらす」Vol.4
(500円+税) 戸塚周辺の幼稚園、保育園入園に際しての準備号として発行
(下)「ひろばカフェ」をつくらう(500円+税)。「こまちカフェ」を作った経験から社会で子育てをする「ひろばカフェ」をつくるノウハウを説明しています。(問) ☎045-443-6700
またはホームページを参照

横浜の底力

Volume 44 文◎山崎洋子 やまざき・ようこ

1947年、京都府生まれ。横浜市在住。「花園の迷宮」で第32回江戸川乱歩賞受賞。小説、ノンフィクションなど横浜を舞台にした作品が多く、「赤い崖の女」「人魚を食べた女」「横浜唐人お吉異聞」「横浜の時を旅する—ホテルニューグランドの魔法」などがある。近著は「誰にでも、言えなかったことがある—経に傷持つ生い立ちの記」。

これを書いているいま、ネットに投稿された「保育園落ちた日本死ね」という文章が大きな話題になっている。なにか一億総活躍社会だ、なにか少子化対策だ、保育施設が足りないじゃないか、女性は社会で活躍したくてもで

らに、「親子のつとめ広場」「私立幼稚園はまっ子広場」「子育て広場」「乳幼児一時預かり事業」の補助など、地域のさまざまな場所を利用した交流、情報交換の場が設けられている。なのに、オワコン？

首を傾げる私に、船本さんが続ける。「どれも、評価されているものだと思いますよ。でも、子育て事情は一人一人、異なるでしょ。自分が望むことと行政の政策が必ずしも一致しないんです。住んでいる区によって保育施設の競争率も違う。出産で休職して、その後、復職のために保育所に申し込む時も、ランクの壁があります。会社で8時間勤務だとAランク、パート勤務だとその下、居宅仕事とか、私のような、仕事の日時が一定ではないフリーランスだと、さらにランクが低くなる。家庭の事情や仕事の内容ではなく、決められたランクで、まずは入所できるかどうかが決まるんです。うちは二人の子どもを同じ施設に入れることができなくて、上の子は認可保育園、下の子は小規模保育施設。けっこう大変ですよ」

「でもね、すべてを満足させられる政策なんてあり得ないと思うんです。だったら、行政に足りないところは自分たちでやってみせ、こうしたらより良くなる、という具体的なことを、行政や社会に提案していこうと……」

「でもね、すべてを満足させられる政策なんてあり得ないと思うんです。だったら、行政に足りないところは自分たちでやってみせ、こうしたらより良くなる、という具体的なことを、行政や社会に提案していこうと……」

か昔という世代の私も胸を撫で下ろす。高齢者が良い老後を送れるかどうかは、若い世代やその子どもたちにかかっているのだ。

船本さんは、中区の子育て世代を中心に「まま力の会」というグループを立ち上げた。子育てしやすい地域作り、社会とつながる子育てがテーマだ。ミシンがなくても苦手でも、得意な人に教わりながら入園グッズを作る「ミシンの会」。おむつ替え可、ベビーカー可、子ども可、という店を地図にポイントする「ままつぶ作り」。災害時を考えながら自宅周辺を歩く「防災おさんぽ」。一人が一品ずつ作り、分け合うだけで豪華おせちになる「持ち寄りおせち」などなど。

「子育てグループの立ち上げ」

「子育てグループの立ち上げ」

「子育てグループの立ち上げ」